



前世で辛い思いをしたので、 神様が謝罪に来ました 5

α L P H α L I G H T

初昔茶ノ介

Hatsumukashi Chanosuke



アニエ

魔法学園の生徒。
学年一の魔法の実力者で、
勝気なしっかり者。
ブルーム公爵家の
一人娘。

オージェ

サキと同じクラスの
男の子。友達思いで
何事にも
一生懸命。

フラン

アルベルト公爵家の子供。
爽やかで優しいが、
実はちょっと腹黒い
ところも…?

キール

ギャンブルの街・
メルブグの貧民街に
住む孤児の少年。
妹であるアリスを何よりも
大事に思っている。

アリス

キールの妹。
とても病弱で、
自分に自信がない。
キールを誰よりも
信頼している。

ミシャ

きこば
気配り上手で
優しいサキの
クラスメイト。

レオン

たく
強くて頼れる
サキの先輩。
クロード公爵家の
次男。

ネル

女神ナーティ様がくれた
サキのお付きの猫。
様々な魔法でサキを
サポートする。
ちなみに女の子。

サキ

不幸ばかりの前世を神様に
謝罪され、幼女として
異世界転生した。
桁外れな才能を持つものの、
コミュ障で人見知り。

Characters
登場人物紹介

私——雨宮咲は雷に打たれて、生涯を終えた。

だけど、神様であるナーティ様のおかげで、魔法の世界——シャルズに転生することに。前世ではいじめ、虐待、パワハラなどを受け続けた不幸な日々を送っていたんだけど、それはナーティ様の弟であるラスダ様の手違いだったみたいで、お詫びとしてたくさんのお金と、頼れる子猫の従魔ネルをもらった私は、サキ・アメミヤとして第二の人生をスタートさせたの！

転生後に私が養子として身を寄せたのは、王都エルトにあるアルベルト公爵家。

当主であるフレル様、その奥さんであるキャロル様、そして二人の子供であるフランとアネットが私のこの世界での新しい家族だ。今ではフレル様とキャロル様をパパ、ママと呼んでもらっているし、アネットは私のことを『お姉さま』って慕ってくれてるんだよね！

そして私は魔法を学ぶために学園にも通わせてもらっているんだけど、ここではブルーム公爵家の一人娘で努力家な赤髪の女の子アニエちゃん、水魔法が得意で青髪とメガネがトレードマークの女の子ミシャちゃん、おっちょこちょいだけど誰よりも元氣な金髪の男の子オージェと仲良くなって、一緒に勉強も遊びも頑張っているんだ！

後、最近では学園一強いロード公爵家次男のレオン先輩とも魔法や体術の勉強をしていて、以前にも増して強くなっているような気がする。

そして最近、友達や先輩だけじゃなくて初めての弟子ができたの！

その弟子っていうのはなんと、王都のお姫様のプレシア！最初は私に家庭教師なんて務まるのになって不安だったんだけど、プレシアは回復魔法の才能がすごくある上に、とっても慕ってくれるので、もう一人妹ができたみたいだったんだ。

だけど、そんなプレシアが急に攫われてしまって、王都は大混乱！

フラン、アニエちゃん、ミシャちゃん、オージェ、そしてパパと王様と協力して行方を追ってたり着いた先は、国家反逆組織・リベリオンの基地。リベリオンの幹部であるロズデールが私たちの前に立ちはだかった。

それでもなんとかプレシアを助け出すことには成功したんだけど、ロズデールはプレシアの持つ膨大な魔力を、魔力が宿っていない魔石——空の魔石に封じ込めて逃げてしまった。

その魔力を何かに使おうとしているみたいだけど……詳しいことはわかっていないんだよね。

ロズデールとの戦いの中で、精神干渉の魔法を乗り越えたことで、私も前のようにオドオドしなくなっただけ、何があっても絶対に仲間を傷つけさせないんだから！

1 クレールさんのため息

「はあ……」

自室で宿題をしていると、部屋の窓ガラスを拭いていた専属メイドさん——クレールさんが、小さくため息をついた。

最近クレールさんのため息が多い気がする。

プレシアを助け出してから一ヶ月が経ったけど、その間私は四学年代表として代表戦に出場したり、テストに追われたりと、忙しくも平和な学生生活を送っていた。

楽しみはそれだけじゃない。私はプレシアを助けたご褒美として、空の魔石をアクアブルムの魔石研究所からたくさんもらった。

空の魔石にはあらゆる属性の魔力を込めることができる。それによって、魔法陣などを使って魔石のいろんな使い方を研究する学問——魔石工学の研究範囲はアクアブルムの研究員にも負けないくらい広がった。

そんな順風満帆な私の最近の悩みがこのクレールさんのため息なのだ。

クレールさんは、ちょっとドジっ子だけど気が利くし私のことを身を賭して守ろうとし

てくれる、大事な人。

そんな優しくて可愛いクレールさんの悩みを解決してあげたい。でも、人の悩みを無遠慮に聞き出すのもよくないし……ってこの数日間、ぐるぐると考えている。

「はあ……」

そんな私のため息と、クレールさんのため息がちょうど重なるのだった。

次の日、みんななら何かわかるかもと、私はお昼休みにこの話題を出してみた。

すると、まずフランが少し考えた後に口を開く。

「クレールの悩みかあ……ちよつと思ひ当たらないな。お腹でも空いてたんじゃないか？」

「そんな単純な……」

私はびつくりしてしまふけど、アニエちゃんもフランの意見に同意する。

「でも確かにあのクレールさんの悩みってなかなか思いつかないわね。なんとなくフランの言うお腹空いてたっていう推理がしっくりきちゃうもの」

「アニエちゃんまで……」

苦笑いする私に、ミシャちゃんが聞いてくる。

「最近クレールさんに何か変わったことはなかったんですか？」

「変わったことかあ……あ、そういえばこの前、庭で——」

私は数日前の庭でのクレールさんの様子を思い出す。

「もうちよつと……もう少しでうまくいきそうなんですの!!」

「アネット、頑張ってー」

私はアネットが新しい炎魔法を体得したいということで、訓練に付き合っただけでいた。フランも新しい魔法を思いついたらしく、その開発に勤しんでいる。

この世界には炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治癒、特殊という十一種類の魔法属性がある。それらの魔法は繰り返し使用して経験を積みこむことでスキル化し、発動過程を簡略化したり、オリジナルの魔法を生み出したりもできるのだ。

スキル化した魔法は、強さや難しさによって第一から第十まであるナンバーズに分類され、どのランクの魔法も一度発動できればその後もずっと使えるようになる。

それだけでなく、魔法の飛距離を伸ばす【ア】、速度を速くする【ベ】、効果時間を伸ばす【セ】、操作性を高める【デ】といったワーズや、魔法に複数の属性を付与するエンチャントなどと組み合わせてさらに強化できるの。

まあ魔法にも属性ごとに向き不向きがあるから、一般的には生まれつき魔法が得意だと言われている貴族ですら五、六種類の属性しか使えないんだけど……私は生まれつき全て

の属性への適性があるんだ。

フランは闇属性の魔法が得意だから、それを生かした新たな魔法スキルを開発しようとしているんだけど、どうやら苦戦しているみたい。

「サキ、どうもうまくいかないんだ。何か解決策はないかな？」

「うーん、一回空からの視点を見てみるとか？」

「それはいいかもしれないね。ウイムも一緒に行こう」

私はアネットに「ちょっと待っててね」と告げる。

そしてダークスワロウのウイムがフランの肩に止まったのを見て右手をフランに出すと、フランが私の手を握った。

「それじゃあ、いくよ」

「よろしく頼むよ」

【二重付与・【空中浮遊】】

私とフランの体がふわっと浮かび、段々お屋敷が小さくなる。

今回フランが開発しようとしている魔法は、従魔であるウイムと視覚を共有することで上空から偵察する闇魔法——【視覚共有】。言葉を介さず意思疎通する魔法である【思念伝達】の応用なんだって。

ちなみにウイムと聴覚を共有するスキル【聴覚共有】はついこの間開発に成功した。

上空からの眺めを知ること何か掴むといったけど……。

「やっぱり空中浮遊はすごいね。眺めがいい！」

笑みを浮かべながら言うフランに、私は聞く。

「参考になりそう？」

「うん。ウイムはいつもこんな景色を見ているんだね。ちよつと羨ましいよ」

そう言ってフランはウイムの頭を撫でた。

「ずっと見ていたら飽きちゃうんじゃない？」

「そんなものかな？」

気のせいかもしれないけど、ウイムもうんうんと頷いているように見える。

そして、フランが言う。

「ありがとう。もう降りよう」

「うん……あれ？」

降りていく途中で、屋敷の陰にいるクレールさんがチラッと見えた。

地面に着いたけど、どうやらフランは気付かなかったみたいでまたウイムと一緒に魔法の練習を始めた。アネットもまだ自主練に励んでいるみたいだ。

私はなんとなく気になって、クレールさんがいたところに歩いて行つた。

クレールさんは何をするでもなくただぼーっと立っていて、近づく私に気が付く様子が

ない。

「クレールさん？」

「ひゃあ！」

私が急に声をかけたから、クレールさんをびっくりさせてしまったようだ。

「さ、サキ様。どうされたのですか？」

「あ、特に用事があったわけじゃないんだけど……空からクレールさんが見えたから」

「そうだったんですね」

言いながらこちらを向いたクレールさんの手には、赤い花が握られていた。

「そのお花は？」

「えっと……そう！ サキ様のお部屋に飾ろうかと思ひまして」

クレールさんは少し焦っているように見えた。びっくりさせちゃったから、そのせいか？

「そうなの？ 綺麗なお花だね。えっと確か……ゼラニウムだったかな。こんな寒い時期には珍しいお花だね。あ、そういえば、ゼラニウムって色によって花言葉が違うの知ってる？」

「え？ そんなんですか？」

「うん。この赤いゼラニウムの花言葉は……『君ありて幸福』だった気がする」

ママは草魔法が得意で、その影響で小さな時から花をたくさん調べたり育てたりしていたらしい。今でもお屋敷の中の花はママが育てているんだけど、私もお花の水やりを手伝っている。その中で花の知識を得たのだ。

「君ありて……幸福……」

私の雑学を聞いたクレールさんの顔が、ゼラニウムみたいに赤くなっていく。

「クレールさん？」

私が聞くと、クレールさんは明後日の方向を向いて叫び出す。

「はっ……わ、私……私……心の準備がぁー!!」

「あ、クレールさん！……行っちゃった」

クレールさんはそのまま走り去っていった。

「——ってことがあったの」

学校で、私は庭であったことをアニエちゃんとミシャちゃんとフラン、オージェに話した。

フラン以外の三人も、よく家に来るからクレールさんのことは知っているのだ。すると、アニエちゃんとミシャちゃんとフランはキリッとした顔で呟く。

「恋ね」

「恋ですね」

「恋だね」

お昼ご飯のサンドイッチを食べながらオージェは不思議そうに声を上げる。

「えー、なんでわかるんすか？」

私も、オージェに賛同するようにコクコクと頷く。

「屋敷の誰の目にもつかない場所です、ほんやりとした表情で殿方^{とのがた}にもらった花を持っている……はあ、メイドさんの隠れた恋、素敵……」

ミシヤちゃんのうっとりとしながらの発言に、アニエちゃんも同意する。

「顔を赤くして走り去ってくなくて、クレールさんらしい焦り方よ。それに『君ありて幸福』の花言葉に因^{ちな}んでのアピールなんて、相手の人もなかなかクレールさんがわかっていないじゃない」

確かにクレールさん、そういうロマンチックなアピールに弱そう……。

「そうなると、一番の問題があるね」

フランは人差し指をぴつと立てる。そしてニヤリと言う。

「屋敷の誰がクレールさんに花を渡したかってことさ」

屋敷の誰か？ え？ そんなことまでわかるの？

そう戸惑^{とまど}う私の横で、オージェも驚^{おどろ}いている。

「なんで屋敷の人だってわかるんすか？」

「お花を渡されたばかりだからほーつとしていて、そこをサキに話しかけられて焦っちゃったって考えるのが自然じゃない？」

アニエちゃんの言葉に、フランも頷く。

「それに、屋敷の敷地内^{しきち}で働いてるクレールさんに花を渡せるのは、当然屋敷で働いている人に決まっているしね」

みんなすごいなあ。ネルにクレールさんの悩みについて聞いても『見当が付きません。空腹感^{くうふくかん}の増大が原因である可能性が高いと思われます』とか言っていたのに……。

「これはもう一つ二つアプローチがあってもおかしくないね」

「ええ、これは確認しなくてはいけませんね……」

フランとミシヤちゃんが目をキラんと輝かせてそう言い出したものだから私は口を開く。「え？ 別にそこまでしなくても私は悩みがわかればそれで……んぐー！」

「そうね、これはクレールさんの個人的なことでも……むぐー！」

私とアニエちゃんの口をフランとミシヤちゃんが手で塞^{ふさ}ぐ。

「早速今日学園が終わったらクレールの様子を見に行こう」

「ええ、フランくんの【^{クリアフラインド}姿眩まし】があれば尾行^{びこう}なんて余裕です！」

フランとミシヤちゃんがそう言い出す。確かにウイムが使う姿を見えなくする闇魔法・

クリフ・フラインド

姿眩ましを使えば気付かれないように調べられるだろうけど……。

口を塞がれている私とアニエちゃんに代わってオージェが反対しようとして――

「でも、本人に聞けばそれでいいことなん……んぐむ！」

オージェの口も、ミシャちゃんの空いている手によって封じられた。

こうして私たちは学園が終わったら、クレールさんの尾行作戦を決行することとなった。

学園が終わって、私とフランはアネットとともに屋敷に戻る。

「おかえりなさいませ。フラン様、アネット様、サキ様」

いつものように専属のメイドさんたちが迎えてくれて、私たちはそれぞれの部屋に戻った。

私は着替えを終えると、私が脱いだ服を片づけるために部屋を出て行くとするクレールさん呼び止める。

「クレールさん。今日この後、みんなで一緒に研究所に行くから」

「かしこまりました。それでは馬車を用意いたしますね」

「うん、ありがとう。フランと一緒に行くから、クレールさんは屋敷に残ってても大丈夫だよ」

「え？ わかりました」

不思議そうに首を傾げて部屋を出るクレールさんと、すれ違うようにフランが部屋に入ってきた。

「サキ、わざわざあんなこと言わなくてもよかったのに」

「あんなこと？」

「クレールは屋敷にいてもいいよって。僕と一緒に研究所に行く時はクレールはいつも屋敷に残っているからね」

「あ……」

私は口を押さえる。だから不思議そうにしたのか……。

「さて、とにかく研究所に向かおう。みんなもう来ているはずだよ」

クレールさんに怪しまれないように、一度研究所に集合してから屋敷に戻ることにしている。

研究所に行くと、三人とも到着していたのすぐに歩きで屋敷まで戻る。

研究所から屋敷までは徒歩で二十分くらいだから、歩きでも行き来できないんだよね。

「それじゃあ、クレールさんの様子を見に行きましょう！」

「まずは屋敷の近くまで行って、そこから姿眩ましで屋敷に潜入。クレールを尾行する流

れでいいね」

「ええ！ その作戦でいきましょう！」

テンション高めのミシャちゃんとノリノリのフランが二人で作戦を練る。

うちの冷静作戦担当三人……大丈夫かな。

そんな二人をアニエちゃんとオージエも無言で眺めていた。二人も私と同じ気持ちなんだよね。

そんなこんなで屋敷に着くと、私たちは作戦通り姿眩ましで姿を隠しつつクレールさんを捜す。

姿眩ましを発動していると、お互いの姿も見えなくなってしまうので、一列になって前の人の服を掴みつつの移動だ。ちなみに並びは前からフラン、ミシャちゃん、アニエちゃん、私、オージエ。

『さて、潜入作戦だから思念伝達を使って会話をしよう』

フランが早速思念伝達を使って言う。

魔法をこんな使い方してもいいのかなあ……なんて思っちゃうけど、ここまできたらそんなことも言ってもらえないか。

『クレールさんは一体どこにいるんでしょうか』

ミシャちゃんの言葉に、私は答える。

『いつもならだいたい私の部屋にいるか、他のメイドさんと一緒に洗濯や掃除をしてるけど……』

『じゃあまずは洗濯場から見に行こうか』

フランの言葉に頷いて、私たちは洗濯場に移動するけど、クレールさんはいない。

『じゃあ、屋敷を回って捜してみ——』

そうフランが言いかけるけど、そこで一人のメイドさんが興味深いことを口にする。

「ねえ、聞いた？ クレールの話」

それに対して他のメイドさんと言う。

「最近クリフさんと仲がいいって話？ お似合いの二人ではあるわよね」

「クレールもここ数日様子がおかしいじゃない？ もしかして何かあったんじゃないかしら」

それからすぐに話題が変わってしまい、これ以上情報は得られなかったけど、それでも大収穫だ。

『皆さん、一旦サキちゃんの部屋で話をしましょう』

ミシャちゃんは、昂る気持ちをなんとか抑えつつ、移動することを提案したのだった。

私の部屋に入ると、フランは一旦姿眩ましと思念伝達を解いた。

「フランくん、まずクリフさんについて説明を」

ミシャちゃんはフランに話を振る。

「クリフはうちの護衛騎士の一人で、確かクレールと同じくらいの年齢だったはずさ」

クリフさんは森で馬車が魔獣に襲われた時に助けを呼んでいた人。その時森に住んでいた私はクリフさんの叫び声を聞いて、居ても立っても居られずに助けに入ったんだけど……そのおかげでパパたちと出会うことができたんだよね。言われてみれば結構イケメンさんでモテそうな雰囲気がある。

「なるほど……つまり、メイドと騎士の隠れた恋なんですね！」

ミシャちゃんは嬉しそうな表情で立ち上がりながら叫ぶ。

「いや、別に隠れては……んぐ！」

またしてもアニエちゃんの口をミシャちゃんが塞ぎ、続ける。

「次はその騎士さんのところへ行きましょう！ あクレールさんを虜にした方法を聞き出さなきゃ私、今日の夜眠れませんー！」

「そんなに？」

私が聞き返したタイミングで、フランが人差し指を口に当てて、姿眩ましを発動させながら言う。

「しつ……みんな静かに。ウイム」

ガチャという音の後に、部屋の中に箒を持ったクレールさんが入ってきた。

「……？」

扉を開けてから首を傾げるクレールさん。

ひとまず箒で床を掃除し始めるが、二、三回箒で掃いて手を止める。

「……なんだか、視線を感じる……？」

私たちはビクッと体を震わせる。

『みんな、とりあえず庭へ出よう。足音をなるべく立てないように』

フランが念話で出した指示に頷いて、私たちはクレールさんにバレないように部屋をなんとか脱出した。

そのまま屋敷の庭へ行き、フランが姿眩ましを解く。

「この時間だと、そろそろ騎士たちが訓練から戻ってくる頃だと思うんだけど……」すると、フランの読み通り訓練から戻ってきたたぐさんの騎士さんたちが歩いてきた。

私たちが話を聞くべく歩いて行くと、騎士さんの一人が声をかけてくる。

「これはこれは、フラン坊ちゃんにサキお嬢ちゃん……とそのご学友までお揃いで」

「みんな、訓練お疲れ様。クリフはいるかな？」

「え？ 俺ですか？」

フランに名前を呼ばれて、クリフさんはちょっと緊張した様子で前に出てきた。
「ごめんクリフ、ちょっと話があるんだ。他のみんなは行っているよ」

クリフさん以外の騎士さんが帰ったのを確認してから、クリフさんは口を開く。

「それで、話っているのはなんですか？」

「ああ、大したことじゃないんだ。一週間くらい前に、クレールに花を渡さなかったかい？」

「花……ですか？」

クリフさんが首を傾げるのを見て、ミシャちゃんは追撃する。

「そうです！ 赤いゼラニウムですよ！」

「赤い……ああ！ はい、確かに渡しました」

「そ、それは！ なんでクレールさんに渡したんですか!？」

ミシャちゃんはテンションが爆上がりで、転びそうなくらい前のめりだ。

そんなミシャちゃんとは対照的にクリフさんは顎に手を当て、冷静な口ぶりで言う。

「えっと、確か遠征訓練の帰りにあまり見かけないあの花を見つけたんです。それでキャロル様にどうかと思いますして、摘んできたって流れだったかと」

「え？ キャロル様……?」

ミシャちゃんの表情が曇る。

クリフさんは頷く。

「はい、キャロル様はお花が好きなので。でも王都の外にはなかなか出られないですから、もし外で珍しい花があったら持ってきてほしい、と言付かっているんです。でも、戻ってきてからキャロル様のフラワールームを確認すると、すでに同じものが咲いていたので持て余しまして。その後、屋敷の裏の井戸に、ちょっと顔でも洗おうかと思っただけでここにクレールがいたんです。この間訓練で負った怪我を魔法で治してくれたお礼をできていなかったの、ちょっと良いかな、と……」

えっと……それじゃあクリフさんはクレールさんへ特にアピールしたつもりはなかったけど、クレールさんはヤキモキしていると……。

全員がそう理解したところで、ミシャちゃんは両手両膝を地についた。

「トキメキ殺し……」

こんな感じで、私たちのクレールさんの尾行は肩透かしな感じで終了した。

クリフさんの話を聞いた次の日。私たちはまたお昼休みに集まっているのだけれど……。

「はあ……」

とうとうミシャちゃんまでクレールさんみたいなため息をつくようになってしまった。
「それにしても、これからクレールさんはどうするのかしら？」

「どうするって言っても、クリフさんがあんな感じじゃあ……」

「はあ……クレールさんがなんだか可哀想かわいそうです」

心配と落胆らくたんを言葉にするアニエちゃん、オージェ、ミシャちゃん。私も同じ気持ちだ。しかし、フランだけはあっけらかんとしている。

「別に叶かなわぬ恋ってわけじゃないだろう？　ただ、今はクリフにその気がないってだけで」

「それはそうですけど……クレールさんの性格を考えてください。自分からアプローチできるとは思えません」

ミシャちゃんがそう言うと、フランは首を傾げる。

「そもそもクレールは本当にクリフのことが好きなのかな？」

確かに花をもらって気になっちゃったただけだとしたら、花を渡した経緯けいゐを知って『それなら別に』ってなる可能性もあるけど……うーん、恋愛のことは本当にわからないよう。

「はい、午後の授業始めますよー」

先生が教室に入ってきて、私たちは各自の席に着いた。

午後の授業中はずっとクレールさんのことを考えていた。そして、私はあることを決めた。

授業の後、いつも通りみんなと特訓してから私はお屋敷に戻る。

「着替え、こちらに置いておきますね」

いつものようにクレールさんが私の着替えを置いてくれた。

制服から着替えながら、私はクレールさんの方を向く。

「クレールさん！」

「は、はい!？」

想像よりも大きな声が出てしまつて、私もクレールさんもお互いにびっくりしてしまった。

私もこんな恋愛関係のことについて聞くなんて経験がないから、緊張してしまつてのかもしれない……。

「私、クレールさんに聞きたいことがあるの……」

「え？　あ、はい……ですがサキ様」

「答えたくなかつたらいいの、本当に無理をしなくてもいいから……」

「いえ、それよりもサキ様！」

いつもなら私の話を聞いてくれるのに、私の言葉を遮さへぎるようにクレールさんが話すなんて珍しくて、首を傾げてしまふ。

「その……サキ様のお話はなんでもお聞きますので、下を穿はいてください……」

「あ……」

上半身は着替えたけれど、下半身はスカートを脱いでそのままだった……。緊張のあまり空回りしてしまつた恥はずかしさの中着替えを終えて、いつもお茶をしているテーブルに着く。その間クレールさんは紅茶を淹いれてくれていた。

「それでサキ様、私に聞きたいことと言うのは……」

カップの中の揺れる紅茶を数秒眺めて、覚悟を決めた私はがばつと顔を上げる。

「クレールさんはクリフさんのことが好きなの!？」

「……ええ!？」

クレールさんは私の質問にすごく驚いていた。

それどころか驚きのあまりおでこに手を当てちよつとよろめいてすらいる。

「この前私が庭で声をかけた時に持っていたゼラニウムは、クリフさんがくれたものなんだよね? それでクレールさんはクリフさんときめいちゃつたの?」

「え、えーつと……」

頬ほおを赤くして口ごもるクレールさんに、私は意を決して言う。

「あのね……クリフさんはこの前のお花は……ただ治療ちりょうをしてくれたクレールさんへのお礼に渡したただけだったんだって」

「あ、そう……だったんですか」

真実を聞いたクレールさんは少しだけがっかりしているように見えた。

「ごめんなさい……私が変に意識するような豆知識を言っちゃつたから……」

あの時、私が赤いゼラニウムの花言葉なんて教えなければ、クレールさんも今回のことで変に意識することもなかったんじゃないかって、私はずつと申し訳なく思っていたのだ。

そのせいでクレールさんがこうしてがっかりしちゃうのも、すごく悲しいし責任を感じてしまう。

しかし、そんな私を見たクレールさんは優しく微笑ほほえんだ。

「サキ様、そんな泣きそうな顔をしないでください。大丈夫です。確かに赤いゼラニウムをもらったことはとても嬉しかったですし、そのせいで最近……お恥ずかしながら少しモヤモヤしていたのも事実です。でも、クリフのことを……好きになったのは今回の花をもらったからなんかじゃありませんよ」

「そうなの?」

私がクレールさんの顔を見ると、クレールさんは照てれ臭そうにはにかんだ。

「はい。私はもつと昔、このアルベルト家にお仕えし始めた頃からクリフのことを気になっていたんです。そうですね……それじゃあ、少しでも私の昔のことをお話ししますね。あれは、八年前のこと——」



「クレール、いくよ!」

「ま、待って! お姉ちゃん!」

孤児院で育った私——クレールと姉のメアリは十歳の時に栄誉ある四公爵家の一つ、アルベルト家にメイドとして雇っていただけのことになったのです。

貴族家はたくさん使用人が必要なので、孤児院の子供を小さい時から教育し、優秀な人材として雇い入れることは珍しいことではありません。魔法学園に行くことは叶わなくとも公爵家に仕えることができる——ただそれだけでも私とお姉ちゃんにとっては光栄で誇らしいことでした。

「私はメイド長のシルク。メアリ、クレール、早速ですが、その給仕服に着替えてください。着替えた後はメイドとしての基礎を覚えていただきます。これから行すべき仕事、礼節、メイドとしての心得などについて、叩き込みます。それでは、ついてきてください」
こうして私たちはシルクメイド長に言われた通り、先輩のメイドたちの仕事を見て回り、その後に礼節のお勉強を始めたのですが——

「クレール! お辞儀の角度が浅い! もっと深くなさい! それから歩く時にやや猫背

になっていきます!」

「は、はい!」

「メアリはそのままで構いません。次は洗濯場に行きなさい。私から仕事を学ぶよう申しつかったと持ち場の者に伝えて、他のメイドの言うことをしっかり聞くように」

「はい、かしこまりました」

私と違い、お姉ちゃんは優秀で、言われたことはすぐにこなして先へ行ってしまう。

結局お姉ちゃんはほとんどの仕事をその日のうちに覚えてしまったのです。

それに比べて私は……。

「それでは挨拶から」

翌日、シルクメイド長に言われて、私は頑張って声を張ろうとしますが……恥ずかしくて小さな声しか出せません。

「はい……行つてらっしゃいませ、旦那様」

「声が小さい! もっとはっきりと言いなさい!」

「は、はい!」

挨拶も、お辞儀も、全然ダメで……。

次の日も、また次の日も……何度も注意されて、仕事の覚えも悪くて……。

「私……私って……なんてダメな子なんだろう……」

自分のダメっぷりを突きつけられて、何度も怒られて疲れてしまつて。私は休憩時間^{きゅうけいじかん}に屋敷の裏の石垣^{いしげん}の陰でしゃがみ込んで一人、泣いていました。

公爵家に仕えることは簡単ではないと覚悟していたつもりでしたが、想像よりも遥^{はる}かに大変な現実^{げんじつ}に、私は打ちのめされていました。

しかし、そこで驚くべき出来事が起きたのです。

「おわあ！」

目の前に急に私と同じくらいの男の子が降ってきたのです。

「きゃっ！」

私が身を縮こまらせていると、上から怒号^{どごう}が聞こえます。

「しばらくそこで反省^{ちんせう}していろ！」

「ってーな！　んだよ！　ちょっとミスっただけじゃんか！　……ん？」

転ぶように着地した男の子はがばっと起き上がって、おそらく投げ飛ばしたであろう男の人に向かって叫んだのです。しかし、その男の人は去っていつてしまっています。

そこで男の子はようやく私に気が付いたのでしょう。じつとこちらを見てきました。

「なんだ？　お前もなんか失敗して投げ飛ばされたのか？」

「え!?　いや……失敗はたくさんしてるけど投げ飛ばされては 아니かなあ……」

「そうなのか？　じゃあなんでこんなところにいんだよ」

男の人はそう言つて勢いよく起き上がって石垣にどかっと腰を下ろしました。

私が育った孤児院は男女別に育てる方針だったので、もちろん同い年くらいの男の子と話す機会なんてありません。それはそれは緊張しました。

そんな私の内心になどまったく気付いていないのでしょう、男の子はさらに言葉を重ねます。

「目の周りが赤いし、まさか泣いてたのか？」

男の子にズバリと当てられて、私は無言でこくりと頷きました。

すると男の子は首を傾けます。

「なんで泣いてんだよ？　メイドなら屋敷の中で働いているから安全だし、疲れないだろう？」

私はその言葉にカチンときて、思わず言い返しました。

「そ、そんなことないよ！　お洗濯物はよろけて転んじゃうくらい重たいし、洗い物の水は冷たいし、お辞儀の角度は深すぎて腰や背中が痛くなるし、旦那様や奥様を前にしたら吐きそうになるくらい緊張しちゃうんだからー！」

「かー！　贅沢^{ぜいたく}だね、俺なんて今日は無理やり訓練で猪^{ぶた}の前に放り出されたんだぞ！　それから走り回つてやっと逃げられたと思つたらガスタスのおっさんが逃げるなって怒

るしよ!」

「でも生きてるしちゃんと助けてくれてるんでしょ!? 私なんてこの間——」

私と男の子は自分がアルベルト家に仕えてからどんなことがあったのか言い合いました。そして二人で話す内容がなくなってしまうくらい睨み合っていると、耐えきれずお互いについて吹き出し笑ってしまったのです。思えば、屋敷に来てから初めて笑ったのがあの時でした。

男の子は名乗ります。

「俺はクリフ。この前アルベルト家に仕えることになった騎士見習いだ。お前は？」

「私はクレール。私も少し前に仕えることになったメイドよ」

「クレールか……よろしくな。そうだ、今度から休憩の時にここに来いよ。お互いの教育係の愚痴でも言い合おうぜ!」

「う、うん……!」

その時のクリフの笑顔はすぐ明るくて、落ち込んだ私の心を照らす太陽の光のようでした。

それから私たちは偶然休憩時間が重なった時に、屋敷の裏で教育係の愚痴を話すようになりました。

話を聞いてくれてそれを笑い飛ばしてくれるクリフの存在が、段々と自分の中で大きなものになっていくのを私は確かに感じていました。

そしてアルベルト家に仕えてから半年が過ぎた頃。

「あ、いたいた。クリフ」

いつものように休憩時間に屋敷裏に行くと、クリフが座っていました。

五日ぶりにクリフに会うので、私の頭の中はここ最近に起きた話したいこといっぱいでした。今日もまたお互いの苦しさを分け合って、楽しい時間を過ごすのだと思っていたのです。

しかし、その時クリフから告げられた言葉は、私の期待から大きく外れたものでした。

「聞いてよ、クリフ。またシルクメイド長にね——」

「なあクレール」

いつもなら私の話を聞いてくれるはずのクリフは、話を遮って真面目な表情を浮かべます。

「俺たち、ここであつて会うのはこれで最後にしよう」

「え……」

その言葉を頭が理解できず——いや、理解はしても拒絶したかったのかもかもしれません。とにかく私は少しの間、声を出すことができませんでした。

しばらくの無言の後、私はやっと声を絞り出します。

「どうして……? 私、何か気に障ることを……」

「違う。お前は何も悪くない。悪いのは全部俺だ」

クリフはそう言いますが、尚更意味がわからなくなるばかり。私は頭を振ります。「わかんないよ。どうしてそんなことを言うの……っ!？」

私はクリフの右手を掴みました。

「どうしたのこれ……」

手甲で隠れていたクリフの右腕は紫色に腫れあがっていました。

「なんでもない……ちよつと訓練で失敗をしただけだ!」

失敗の痕^{あと}を見られたくないのか、少し乱暴に私の手を振り解いてクリフは横を向きました。

「ただの失敗でこんなことにならないよ……」

しばらくの無言の後に、クリフは観念^{かんねん}したようにはあつと思を吐いて話し始めました。

「……今日の訓練の途中に、魔物が出たんだ」

「魔物!？」

新人騎士さんたちの訓練は王都周辺の害獣^{がいじゅう}となりそうな獣^{けもの}の討伐^{しうばつ}が主です。

でも、クリフはまだ騎士になって日が浅い。魔物を相手にしたことなどないはずでした。「途中で応援と魔法使いが来てくれたからなんとか助かったんだ。でも、襲われた時に俺はなにもできなかった……体が固まってみんなの足を引っ張って……ことが片付いた後に

先輩の騎士に言われたんだ。『メイドと楽しくやってるだけで真面目に訓練もこなせてないんだから、動けなくて当然だ』って……」

それを聞いて私もお姉ちゃんに言われたことを思い出しました。

『最近、騎士の子と仲良くしてるようだけどほどにしなさい、こつそりと殿方と会っているのはメイドとして印象が良くない』ってことあるごとに忠告されていたのです。

でも私はそれに耳を貸さず、頭の中はクリフに早く会いたいということばかり。

私にとって、クリフと会うこの時間は大切な時間でした。でも、それが彼を苦しめているんだと気が付いて、私の目から涙^{なみだ}が零^{こぼ}れました。

それを見て、クリフは困ったような表情を浮かべます。

「泣くなよ。悪いのは会おうって誘った俺だし、へマをしたのも俺なんだ。クレールは何も悪くない」

「ごめんなさい……私、私……」

それでも私が泣きやまないので見かねて、クリフが私の頭を撫でました。

人に頭を撫でられるなんて久しぶりのことで、私は驚きました。

そんな私に、クリフは言います。

「クレール、それじゃあ俺と一つ約束をしよう」

「ぐす……約束……?」

「ああ、俺は騎士として、お前はメイドとして、お互いが一人前になったらまたこうやって一緒に話をしよう。俺らが非の打ちどころのないくらい優秀になれば、何をしてたって咎められない——そつだろっ？」

クリフは私を真っ直ぐに見つめながら言いました。

そんな簡単なことではないとわかつてはいました。それでも私はクリフと約束を交わしたのです。

それから私たちがこれまでのように話すことはほとんどなくなりました。

少し心が痛みましたが、これもいつか世界一温かいあの場所に戻るため——そう思うだけで頑張れました。



「——これで私の昔話はおしまいでございます」

ひとしきり話し終えたクレールさんは、ふうつと息をついて私に紅茶のお代わりを淹れてくれた。

お互い一人前になったらまた昔のように話をしよう……そんな子供の時にした約束を今でも大切に思うクレールさん。

この美味しい紅茶も、綺麗に畳まれた服も、塵一つない完璧な部屋も、その約束を果たすために日々努力した結果なのだと思うと、私はクレールさんのことがとても愛おしく感じられた。

「クレールさんはもう十分、一人前なんじゃないかな」

「ふふふ……ありがとうございます。でも、私なんてまだまだですよ。今でもたまに、シルクメイド長に怒られています」

そう言って照れ臭そうに笑顔を見せるクレールさん。

でも、九歳の私が言うのもあれなんだけど、クレールさんだってもう十八歳なんだから、恋をしたいんじゃないかな。

この世界の結婚適齢期はだいたい十五歳から二十代前半くらいと聞いているから、クレールさんはもう結婚したっていい年齢だし……。

「クレールさんは、クリフさんとお付き合っていて、結婚とかしたいなって思う？」

私が聞くとクレールさんは困ったような笑みを浮かべる。

「うーん、そうですね。私は仕えさせてもらってるアルベルト家にとっても感謝しています。クリフと結婚するとなれば、働ける時間がなくなっちゃいますし……」

「それは私が困っちゃうかも……」

「あはははっ。サキ様にそう言ってもらえると私も嬉しいです。でも、休日に二人でお出

かけしたり、一緒に夜空を眺めたり……そういうことができたらきつと幸せなんだろうなと、この八年間で何度も思っていましたよ」

「クレールさん……そっか、話してくれてありがとう」

メイドのお仕事はすごく大変そうだし、恋に費やす時間はないのかもしれないけど、花一つでヤキモキしちゃうくらいにクレールさんはクリフさんのことを想っているんだ。

私は紅茶を飲み終えて、クレールさんがカップを片付けに行ったのを見て部屋を出る。フランの部屋の前行って、扉をノックする。

「サキだよ」

「サキ？ 入ってきていいよ」

私が部屋に入ると、フランは机に広げられている本から顔を上げた。

「ごめん、読書の邪魔しちゃった？」

私が聞くと、フランは本を閉じながら言う。

「いいや、ちょうど休憩しようと思っていたんだ。どうかしたかい？」

「この時間に騎士さんたちがどこにいるか、知ってる？」

「えっと……警備の任務がなければ宿舎に戻ってる頃だと思うけど……」

「わかった！ ありがとう！」

「え!?」

私はフランの声を置き去りに部屋を出て、騎士宿舎へ向かう。

アルベルト家の従者さんが住む宿舎は、お屋敷を出て少し歩いたところにあるのだ。

宿舎は男性用宿舎と女性用宿舎がそれぞれ一棟ずつ建っている。

男性用宿舎に到着し、中に入ろうとすると――

「こちら、ここは女の子が入るような場所じゃないぞ」

そう後ろから声をかけられたので、私は驚きのあまり飛び上がりそうになる。

「ってサキ様じゃないですか。どうしたんですか、こんなむさ苦しいところに」

振り向くと、そこには騎士団のガスタスさんが立っていた。

私は前のめりにガスタスさんに聞く。

「訓練が終わったばかりなのにごめんなさい……あの、今クリフさんはいますか？」

「クリフ？ あいつは今日は警備の任務があるから、屋敷の方に戻ったはずですがねえ」

「ええ!? じゃあすれ違っちゃったんだ!」

ガスタスさんの言葉に、私は思わず声を上げてしまった。

するとガスタスさんは微笑ましいものを見たように目を細めてから言う。

「確か今日は裏門を担当しているはずですから、裏門に行ってみたらどうですか？」

「裏門ね、ありがとう!」

私は来た道戻ってそのまま屋敷の裏門へ向かう。

結構時間が経っちゃってる……クレールさん、心配して捜してるかも……。

「あ、いた！ クリフさん！」

「サキ様？」

乱れた息を整える私を見下ろしながら、クリフさんは戸惑った様子だ。

私は単刀直入に聞くことにした。

「正直に答えて、クレールさんのことどう思ってるの？」

「昨日に続いてまた急ですね……」

「いいから教えて！」

私が詰め寄るとクリフさんは苦笑いを浮かべながらも、答えてくれる。

「クレールは素敵な女性だと思いますよ」

「それだけ？」

「……実は昔、クレールとある約束をしたんです。その約束を果たすために俺は今も必死に訓練や仕事をこなしているつもりです。でも、まだまだなんです。俺から見ればクレールはもう十分約束を果たしてくれているのに、俺はまだまだ約束を果たせていないから——」

思わず私は口を挟んでしまう。

「でも、クレールさんはずっとクリフさんのことを想ってるかもしれないよ？」

私が二人の事情を知っていることを察したのか、クリフさんは優しい笑みを浮かべる。

「それでも、これは俺が言い出したことなんです。それに……こんなまだまだ未熟な騎士じゃあ、クレールのことを守れないでしょう？」

「え？ それって……」

「そうだろ？ クレール」

クリフさんは私の後ろに向かって声をかける。

振り返ると、おずおずとクレールさんが出てきたところだった。

クレールさんの顔は、前に見たゼラニウムのように真っ赤だった。

「い、いつから気付いてたの……？」

クレールさんの言葉に、クリフさんは飄々と答える。

「最初から。サキ様が来る少し前からそこにいただろ？」

ええ!? 全然気が付かなかったんだだけ!?

クレールさんはクリフさんの質問に答える代わりに、地面を見ながら呟く。

「私は別に……守ってほしいだなんて思っていないし」

恥ずかしそうに俯くクレールさんは、すごく可愛かった。

それを見たクリフさんは、私に言う。

「サキ様、大変失礼とは思いますが、少しだけクレールと二人で話をさせていただけますか？」

「え？」

た、確かに私は邪魔者だよね……でも、この後二人がどんなお話するか聞きたい！
でも、クレールさんの幸せのため……うー……。

結局私はクレールさんのためを思い、その場を去った。

二人から見えないところまで歩いて様子を窺うけど……やっぱり声は聞こえない。

「やあ、サキ。なんだか面白そうな場面だね」

「ひい！」

急に後ろから声をかけられたから、驚いて声を出してしまった。

「しー」

後ろを向くとフランが人差し指を立てて静かにするようジェスチャーしていた。

私はそれを見て口を押さえる。

「それより、もう少し近くじゃないと声が聞こえないんじゃないかい？」

「そうなんだけど、さつき人払いされたばかりで……」

「なるほど……」

「そうだ！ フランの姿眩ま^{クリアフラインド}しで近づけば」

「いや、たぶんバレるだろうね」

「どうして？」

「前に騎士の訓練に参加させてもらったことがあるんだけど、クリフはなんて言ったらいいのかな……気配を察知するのがものすごくまいんだ。前の訓練で、姿眩ま^{クリアフラインド}しを使って近づいたのにあっさりバレたんだよ」

「それは……すごいね」

クリフさん……侍^{サムライ}か何かなの？

「ってことは、門番してるところに姿を消して近づこうものなら……」

「真つ二つにされるだろうね……」

「ひいー」

それから私とフランはどうか話^{かた}を盗^{ぬす}み聞きできないか考える。

そして数秒して、フランが膝を打った。

「そうだ、新しい魔法を試してみよう。召還^{サモーン}・ウイム」

フランはウイムを召還^{しょうかん}して肩に乗せる。

「前に開発を手伝ってもらった視覚共有の魔法があつただろう？ あれの応用で聴覚を共有すれば、話を聞けるかもしれない。サキも思念伝達を使えば僕が聞いたことを聞けるだろう？」

「確かに、それならいけるかも！」

「よし、やってみよう。ウイム！ あの二人の近くまで飛んでいくんだ！」
ウイムはフランの指示を聞いて、クリフさんとクレールさんの近くに生はえている木まで飛んでいった。

「聴覚共有」

「思念伝達」

フランと私は魔法を発動した。



サキ様がこの場を離れてしばらく経ったが、クレールは無言だ。

俺——クリフは沈黙に耐えかねて口を開く。

「この前は右手、治してくれてありがとな」

「べ、別に。あんなに血が出てたら気になるに決まってるでしょう!？」

クレールがぶいっと頬を膨ふくらませてそっぽを向くのを見て、つい顔が緩ゆるんでしまふ。

その時——

「——っ!」

一瞬何者かの気配を感じて腰の剣を握るが、振り返ると木の上に鳥が止まっているだけ

だった。

「どうしたの？」

クレールが不思議そうな顔で聞いてくるので、俺は苦笑いを浮かべながら言っつ。

「いや……ただの鳥だった」

「なにそれ、職業病？」

クスクスと笑うクレール。

コロコロと表情が変わるのは見ていて飽きないし、本当に可愛くて愛おしい。

「クレール、悪かったな」

「な、なによ急に……」

「いや、あやふやな約束のせいでお前を困らせているみたいだから」

「やめてよ。謝あやまらないで。私はあの約束にも、約束してくれたクリフにもすごく感謝してるの。あの約束があったから今の私がいるんだよ。まあ、今でもシルクメイド長に怒られてるんだけどね」

クレールは照れながら笑う。

あの時、泣いているクレールの励みにでもなればと思いつきで言った約束を、彼女がこんなに大切にしてくれているのを知って嬉しい反面、申し訳なさもこみ上げる。

「クレールはもう一人前なんだな」

俺が言うと、クレールは面食らったような表情を浮かべた後、優しく微笑む。

「そ、そんなことないよ。クリフだってもう十分立派な騎士になつてると思うよ。私が隠れているのにも気が付いてたし」

「ああ、それなら草むらからスカートがはみ出して揺れているのが見えたからわかったただよ」

「えっ!？」

「相変わらず、そういうところはドジなんだな」

俺は驚くクレールの顔が面白くてつい笑ってしまった。

クレールも俺につられて笑い出す。

「クレールごめん。俺はまだ一人前になれたって自分で思えなくて……」

俺はクレールの前まで行き、立膝をつき左手を取った。

そして、草魔法を使ってゼラニウムを指輪のようにするとクレールの薬指に嵌める。

「今はこんなものしかあげられないけど、いつかこれを本物にしてみせるから。だから、もう少し待っていてくれるか?」

俺はクレールの顔を真っ直ぐ見つめて言った。



私——クレールは今、クリフに信じられないことを言われた。

そしてさらに信じられないことに、私の左手の薬指には花の指輪が嵌められている。

まるでお姫様になったような気分だ。

私はクリフのためならいくらだって待っていてあげたいと思うし、子供の時の約束をこうして気にしてくれているクリフはやっぱりいい男性なんだなって思う。

それでももう一人の自分が囁くのだ。

これまで八年間もクリフへの想いを秘め続けて、話したい気持ちをグツと抑えて、それでこれからもこのまま私はまだずっと待つのか……?

そこでまたハツとする。私はクリフに甘え続けているんじゃないかって、気付いたのだ。八年前に約束をしてくれたのも、今こうして想いを伝えてくれたのもクリフだ。

私は、クリフに一体何をしてあげたのだろうか。私が一人前のメイドになろうと努力しているのは、アルベルト家のため。そして私自身のためだ。

でも、もしかしたら自意識過剰なのかもしれないけど、クリフは私のために頑張ってくれているんだとしたら……私が今クリフにしてあげられることって、本当に待ってあげることだけ……?

私を真っ直ぐ見つめるクリフを見て、胸がちくりと痛んだ。

今まで私は自分のことに必死で、クリフと本当の意味で向き合っていなかったのかもしれない。

クリフはこんなにも私のことを考えていてくれたのに……。

「……クリフ、ごめんなさい。私はあなたのことを待ってあげられない」

私の返事を聞いて、クリフは悲しそうな顔をする。

そんなクリフの頬に、私は唇を押し当てる。

クリフはほんのりと紅く染まった顔で、私を見た。

私は無理やり笑顔を作る。

「私はもう待ってあげない。だって……私はあなたのことをもう一人前だと思ってるから！」

うまく笑えているだろうか。緊張で声が震えそつだ。涙が出そうなくらい顔と目頭が熱い。でも伝えないと……私の想いを！ サキ様、不埒な私をお許しください。そして、私とクリフが幸せになれるための一歩を踏み出す勇気をください……。

「ずっとずっと、あなたのことを想っていました。私はもう待ちきれません。あなたと一緒に……みたいです」

言えた……私の気持ち……。

私の言葉を聞いて、クリフは顔を少し伏せてから私の薬指から花の指輪を外した。

それだけで私の心臓は大きく跳ねてしまう。

さっきまでの行動、言動、それら一つ一つがクリフに対して誠実だったか、ちゃんと正しい選択ができていたのか——ぐるぐると頭の中で答え合わせを繰り返している。

外した指輪を握り、クリフは腰のポーチから小さな箱を取り出して、開ける。

そこには綺麗な宝石で花をあしらった本物の指輪が入っていた。

クリフはそれを左手で優しく箱から出すと、箱をしまってからもう片方の手で私の左手をすくいあげる。

「想い人に認めてもらってるのに、待ってくれとは言えないな」

クリフは花の指輪が外されて空いている私の薬指に、取り出した指輪を嵌める。

「俺も、ずっと君のことを想っていた。俺と一緒にいてほしい」

クリフの顔が近づいてくる。

私はクリフが私にしようとしてることを察して目を閉じた。

数瞬の後、世界で一番温かい感触を唇に感じた。

2 好きの気持ち

はあゝ!! ク、ククククレールさんがキ、キッスを……キッスをしてるう!!

「フ、フラン！ クレールさんが！ クレールさんが！」

壁から顔だけ出して二人の様子を見ていた私——サキは、同じく壁から顔を出しているフランの肩をバシバシと叩く。

「ああ、これはミシヤにいい土産話ができそうだよ」
みやげばなし

「あら、あなたたち。何してるのかしら？」

私とフランの後ろから急に声が出たので振り向くと、ママが笑顔で立っていた。

そしてママも私たちと一緒に壁に身を隠して、クレールさんたちの様子を見始める。

「あらあら？ まあまあ！」

ママもテンションが上がっている様子。

あ、でもメイドさんが隠れて恋愛しているなんて、主人からしたら印象が良くないんじゃない!?

「マ、ママ。これはその……」



私が釈明^{しやくめい}するより早く、ママはフランに言う。
「ちょっとちゃんとフラン。どういう状況なの？」

「僕も詳しくはわからないけど、クリフがクレールに何かしらアプローチしていたみたいだよ。それをクレールがようやく受け入れたって感じかな」

「あらあらあ！　ようやくあの二人、一緒になる決心がついたのねえ！　これはみんなに報告だわあ！　ほら、二人とも行くわよ！　クリフに感づかれちゃ台無^{だぶな}しだわ！」

「え、ちょっと……」

「もう少し……」

フランと私が言うと、ママは怖い顔^{こわい}をする。

「だめよ」

ママに引っ張られて私たちはその場を離れた。

その後、自室に戻ってからしばらくすると、クレールさんが戻ってきた。

「サキ様、私事にお時間をいただき、ありがとうございます」

「え？　ううん、全然大丈夫だよ。それより、ど、どうだった？」

ほんとは全部見てたけど、一応それとなく聞いてみる。

すると、クレールさんは悪戯^{いたづら}っぽい笑みを浮かべた。

立ち読みサンプル はここまで

「ふふふ……全部見ていたんじゃないんですか？」

ば、バレてる!?

私が驚いているのを見てクレールさんは少し顔を赤くする。

「サキ様のおかげです……サキ様のおかげで私は一歩踏み出すことができました」

「え？　私、何もしないよ？」

「そんなことはないですよ」

私、クレールさんに何かしたっけ？

でも、クリフさんとクレールさんがうまくいったんならよかった。

これでクレールさんは好きな人と一緒に……それにしても『好きな人』、かあ。

「クレールさん」

「はい、なんでしょうか」

「人を好きになるって……どんな感じ？」

「え？」

私の突然の質問に、クレールさんは少し戸惑っているようだ。

「私ね……好きな人ができたことがないんだ」

前の世界でも、本当に好きな人なんてできなかったし……唯一告白されてほんの少し付き合った男性には『罰ゲームだったんだ』と言われて振られてしまったし。